

アーネスト・ヘミングウェイ出生の地へようこそ。ここは、1899年に、ヘミングウェイが生まれた家です。

ヘミングウェイは、20世紀のアメリカ文学において、アメリカで、そして世界でも、最も重要な作家の一人とされています。ヘミングウェイは、その生涯の中で、ポリティツァー賞とノーベル文学賞とを受賞しています。

この家は、1890年にヘミングウェイの母方の祖父母であるアーネスト・ホールとキャロライン・ホールのために建てられました。この建築スタイルはクイーン・アン・ビクトリア調として知られており、三角屋根と家の前だけでなく横にまでつながったポーチ、高い天井、そして大きい窓が特徴となっています。今残っているのは、オリジナルではなく再建されたもので、ヘミングウェイがここに住んでいた時になるべく近いように、家具もそろえられており、すべてその時代のものであります。この入り口を入ったところにある等身大の鏡など、家具のうちいくつかは、オリジナルで、ヘミングウェイ家の所有物だったものです。壁紙、カーテン、そしてカーペットは、アーネストの父親のヘミングウェイ氏によって撮影された写真を基にして似たものを置いてあります。ヘミングウェイの姉であるマーセリンは、後に、カーペットは、赤とピンクであり、一家のお気に入りであった装飾のモチーフは、バラであったという、記録を残しています。

1899年、オークパークは、シカゴの中心地の外に位置する人口わずか十万人の町で、この家の前にあるオークパーク・アベニューは、舗装されていませんでした。ここから北に半ブロックのところにあるシカゴ・アベニューは、農場の始まりであり、ヘミングウェイ氏と子供たちは、1.5マイル先のデス・プレインズ川やその周りにあった森林に歩いたり馬車に乗ったりして出かけ、狩やつりをしました。しかしその頃また新しい時代が始まろうとしていました。アーネストが生まれた年、オークパークの住民は町で最初となる自動車を目にしたのです。

ヘミングウェイがビクトリア調の家に生まれたということは記しましたが、彼は家だけでなく、ビクトリア時代の考え方やマナーを重んじる家族に生まれたということは、重要な要素です。ヘミングウェイがオークパークで過ごしたのは、彼の人生の3分の1ほどですが、それは、特に電信や旅行など新しいテクノロジーの時代に生まれ、アメリカの文化が大いに変わっていくのを目の当たりにした幼少時代だったのです。最初の自動車に加えて、もうひとつ変化の兆候であるものに、頭上ライトがあり、これはガスと新しく出てきた電気の両方に対応できるように作られていました。実際この家は、オークパークで最初に電気が通った家として知られています。自動車、電気、電話、ラジオ、映画、そして飛行機といったものは、ヘミングウェイの世界を両親のものとは一段とかけ離れたものにしたのです。

アーネスト・ヘミングウェイの父方の祖父母であるヘミングウェイ家は、この家の向かいに住んでおりましたが、今はもうその家は、ありません。アーネストの父クラレンス・エドモンド・ヘミングウェイは、ドクター・エドとして知られて

おり、オークパーク高校の級友であった若きグレース・ホール(後にヘミングウェイの母となる)とも知り合いました。卒業後、エドはオハイオ州のオバーリン大学で学問し、その後シカゴのラッシュ・メディカル大学で医学を勉強し医者の資格を取っています。エドは、彼の両親と暮らしながら医者としての仕事を始めました。

グレースの母親であったキャロライン・ホールが、癌におかされる頃まで、グレースとエドの関係は、友達以上の何ものでもありませんでした。。キャロラインが亡くなるまで、エドは、ほとんど毎日この家に見舞いに来ていました。この経験が二人の仲を深くし、求婚、結婚へとつながって行ったのです。グレースはエドの求婚を受け入れましたが、まず歌手として一人前になりたいと思っていました。

母親の死後、グレースは、音楽の道を進むためニューヨーク・シティーへと旅立ち、マディソン・スクエア・ガーデンで、初の公共リサイタルを行いました。その時グレースは自分の目は強烈に明るい舞台のライトに耐えられないと気づきました。これは、彼女が子供の時にショウコウ熱をわずらい一時盲目になった経験があるためだと思われています。父親とのヨーロッパツアーの後、グレースはオークパークに帰りエド・ヘミングウェイ氏と結婚しました。ヘミングウェイ氏はホール家に移り住み、ここでヘミングウェイ家の6人の子供のうち、上の4人が生まれることになったのです。

廊下にある家族の肖像画は、この家に住んでいた時のヘミングウェイ家が描かれています。祖父であるホール氏の肖像画はその下にあります。ホール氏は、1905年に亡くなり、それをきっかけにヘミングウェイ家は図書館の隣にあった離れの家に一時的に引越しをしました。そこで、アーネストとマーセリンは熱心な読書家となったのです。その後家族は、600 N. Kenilworthにある新しい家に引っ越しています。右にいるアーネストと左にいるマーセリンが似ていることにお気づきでしょうか。

応接間

まず、ヘミングウェイ氏によって撮影されたこの部屋の写真を見てください。暖炉の横、揺れ椅子、ピアノの側、そしてその他色々なところにグレース・ヘミングウェイの肖像画がかかっています。そのうちのいくつかは、ヘミングウェイ家がこの家に住んでいた時の所有物です。

美術

部屋の前に、復元された景色画がふたつあるのにお気づきでしょうか。オリジナルは、よく絵を描いて売っていたキャロライン・ホールのものでした。若きアーネストはこの画家の目を通して描かれた自然の世界が気に入っていたようです。

彼はまた父親の剥製^{はくせい}作品である「birds under glass」を通して自然を身近に感じていたようでした。

グレース・ヘミングウェイは、シカゴ美術館の家族メンバーシップを保持しており、何度も子供たちを連れて行きました。アーネストは、若者となりパリに行く時までには現代美術の絵画にもすでにふれていました。そのため、ピカソ、マティース、モネなどの作品をもより深く理解し楽しんでいました。ヘミングウェイは、当時新しく友人となりボクシングのパートナーでもあったスペイン人の画家ジョン・ミロの大作を買うために借金までしています。後にリリアン・ロスとニューヨークのメトロポリタン美術館を見学している際に、ヘミングウェイは、こう言っています。

「自分はポール・シザン氏のような風景画なら描けるだろう。自分はレキセンバーグ美術館を空っぽの心で幾度なく歩きながら、シザン氏から風景画の描き方を教わった。シザン氏が生きていたら私の絵の描き方を気に入ってくださりそれを彼から教わったということに喜びを感じてくれるだろう。」

音楽

グレースは、ヘミングウェイ家の子供たち皆に、音楽を勉強させました。この部屋で、彼女は歌い、ピアノやバイオリンを弾きながら、子供たちに歌うことを教えたのです。アーネストはポピュラー・ロマンティックから宗教的な音楽、そしてオペラやクラシックに至るまで、様々なスタイルの音楽に触れて育ちました。そして、高校ではオーケストラでチェロを学び、母親の指揮の元で教会のコーラスでも歌いました。アーネストは飛びぬけて音楽的な才能を見せたわけではありませんが、作曲と執筆の関係について考え、学んだと言われています。

「作曲家やその音調,そして旋律から学べることは、多いにある。

“Farewell”の第一章で、私は “and” という言葉を、ヨハン・セバスチャン・バッハ氏が彼の音楽の中である符を幾度も使ったように、何度も意識して使った。私にはバッハ氏が音楽を作るように、物が書ける時がある。そういう作品は彼にも気に入ってもらえるだろう。」

ヘミングウェイの初期の短編作品には、音楽的な技法がこらされているものもいくつかあります。これは、パリの友人であったガートウルド・スタイン嬢の影響があったようです。スタイン嬢は、「バラはバラでバラである。(a rose is a rose is a rose.)」というような表現を使った人です。

宗教

ヘミングウェイ家もホール家も熱心なプロテスタントのクリスチャンでした。アーネストの母方の祖父は不動産業の仕事に就く前は、シカゴの青年クリスチャン協会の設立者の一人で、その秘書も勤めていました。その祖父は、この部屋で家

族と日々、宗教的な読み物を読んだり祈りを捧げたりしていました。アーネストは、ここで祖父が神と直接話しているのをまのあたりにして育ったのです。

アーネストは第一次世界大戦の際にイタリアで兵士をして滞在していた時にカトリック教会へと転信しました。後に彼はそれは、二番目の妻であったポリーン・ファイファーの影響だったと話しています。しかしヘミングウェイは、生涯を通して他の色々な宗教に興味を持ち、時には無神論さえも唱えるようになることもありました。ある学者は、「ヘミングウェイが“宗教的”だという説は、我々が彼のどの小説、手紙、言い伝え、話を見ているのかで違って来る。」と、言っています。ヘミングウェイの晩年の宗教観は、彼の美術や音楽に対する態度と同じで、初期の家族の教えというよりは、彼の人生経験の集結のようなものでした。しかしヘミングウェイの宗教に対する関心は、ここで始まり生涯を通して続いたのです。

図書室

図書室は、二つの目的をはたしていました。まず、母方の祖父が夕食後に仲間とたばこを吸ったりお酒を飲んだりする時に使われました。こうすることによって、彼は、娘や娘婿の目に付かずにすみました。また、読書家が多かったこの家族の本の収納所としても使われました。アーネストは大学には進学しませんでした。生涯にわたって熱心な読書家で、本を読むことによって幅広い分野を独学しました。彼の五千冊以上にももぼる本のコレクションは今はキューバにあります。その多くにはたくさんのメモが書き付けてあり、ヘミングウェイの本に対する熱意が込められています。

北の壁に、これもまた初期にヘミングウェイに影響をあたえる免許状が、額に納まっているのが見えるでしょうか。これが、アーネストのアメリカ市民戦争への序曲でした。左にある免許状は母方の祖父であったホール氏の軍隊経験を現しています。ホール氏は短い軍隊経験の中で銃撃に病み敵陣の捕虜になった経験がありました。ホール氏はその戦争体験を語ることをせず、家族にも彼の前で戦争の話をしないうちに頼んでいました。

父方の祖父であったヘミングウェイ氏は、ビックスバーグの戦いの戦士で黒人の部隊を引き連れしました。ヘミングウェイ氏は戦争が終わった後も一年間軍隊に残り、軍事的なセレモニーや会合に出席しました。このように、アーネストは一方の祖父から戦争は恐ろしいもので、安易に語るものではないと教えられ、もう一方の祖父からは、戦争は冒険の集結で、英雄伝と自己犠牲が絡み合った尊いものだと教わったのです。小さいながらにしてアーネストは戦争のあいまいさに触れたのでした。そして後に自己自身の第一次世界大戦、スペインの市民戦争、そして第二次世界大戦の経験に元づいて書いた作品（“Farewell to Arms”、“For Whom The Bell Tolls”）にそのメッセージはうまく現されています。

メロディオンは、キャロライン・ホールが若き日に社交会や教会の集まりで弾いたものとよく似ているものです。油絵はアーネストの祖祖母のものです。左と中央がホール家の祖祖母で、右がヘミングウェイ家の祖祖母です。二羽のふくろうは父親であるヘミングウェイ氏が、1896年の新婚旅行中に撃ち取ったものです。彼はよく銃を持ち歩いていたのです。

ヘミングウェイ家の電話（181番）はエド氏がオークパーク病院や自分の患者と連絡を取るのに役に立ちました。エド氏はこの病院の設立者の一人でした。

ダイニング・ルーム

ヘミングウェイ家の両親はたいてい先に朝食をとり、その後に祖父のホール氏と子供たちが朝の食事をしていたと、マーセリンは言っています。ホール氏は朝食を済ませ、新聞を読んだ後自分の子供の頃に聞いた話や動物が出てくる話などを子供たちに聞かせていました。動物の話は毎日話が進んでいきました。

アーネストはこの祖父の話が大好きで、時には話の中の英雄になったふりをしていました。ある時アーネストは皆に自分を「真っ赤に目の光ったカルロ」と読んでくれるように頼んだこともあるそうです。これは、祖父の犬の群れの冒険の物語にでてくる犬のキャラクターです。ヘミングウェイ家では子供たちにも自分で作った話を語らせるという習慣もありました。幼い子供であったアーネストは走り回る馬に乗ったお姫様を助けるという話を作りました。

暖炉の上に鹿の首がありますが、特に話の中で使われたものと言うわけではありません。

台所

台所にグレース・ヘミングウェイが足を踏み入れることはほとんどありませんでした。グレースは母親から、炊事、掃除、洗濯、子供の面倒見など家事一般をする家政婦をやとえるような、仕事ができるキャリアウーマンになるようにとつけられていたのです。グレースは社交仲間のためにフォーマルなお茶会の準備の仕方は学んでいましたが、家族の食事はヘミングウェイ氏が自分で釣った魚などを使って用意していました。

グレースは、女性運動を通して現代女性の地位を主張していました。

後にアーネストは嫁を探すにあたって、そんな母親のような落ち着きがあり知的で働く女性を求めています。19歳のときに彼の初恋であったアグネス・ボン・クロウスキーは、26歳で看護婦でした。（“Farewell to Arms”参照。）アーネストの最初の妻ハドリー・リチャードソンは8つ年上で、ピアニストでした。（“A Movable Feast”参照。）ポリーン・ファイファーは、いつ年上でプロのジャーナリストでした。ハドリーとポリーンとの結婚生活はどちらとも共稼ぎだったので

す。マーサ・ゲルホーンとメアリー・ウエルシュもジャーナリストでした。アーネストは明らかに母親に似た女性に惹かれていたようです。

台所のいすはヘミングウェイ家からつたわったものであり、アーネストの幼少期にミシガンの別荘にあったものです。

タイラーおじさんの部屋

ベンジャミン・タイラー・ハンコックは、キャロライン・ホールの兄弟で生気がみなぎった独身で、有名なミラー・ホール会社に勤めており、出張に出ているときの他はヘミングウェイ家の家族と同居していました。陽気で明るく楽しい人柄でアーネストや兄弟にはとてもいいおじで、いつも旅行先での話や、母親の死後自分の少年時代を船長であった父と兄弟と海ですごした話などをしていました。彼の話はアーネストの世界を広げ、また彼の持ってきた珍しいお土産はヘミングウェイ家の子供たちに興奮をもたらしたのです。タイラーおじさんは、子供たちを流行の先端であるレストランに連れて行ったりバイオリンやピアノを演奏しながら歌ったりとヘミングウェイ家の子供たちの教育にも参加していました。家族が集まった時にタイラーおじさんはアーネストをはじめ皆にゲームで挑戦したり、湖に釣りに連れて行ったり、ある時にはみじかい期間でしたが家でもっとも美人であった家政婦と婚約をしたりなどして、家族を大いに楽しませました。マーセリンは、その家政婦が婚約を破棄し、手紙を置いて去った際におじが子供部屋の隣であった自分の部屋で泣いているのを聞いたと言っています。タイラーおじさんの話はアーネストが12歳のときに書いた初作品である“A Sea Voyage”の基となっています。

家政婦の部屋

この時代の多くの中流階級家庭と同様、ヘミングウェイ家にもコックや家政婦が住んでいました。使用人はたいてい台所のそばや地下室に部屋がありトイレも裏口から出て、外にあったものを使用していました。家族の朝の祈りの時間には使用人も参加し、その後子供たちと台所で一緒に食事をしました。また、ヘミングウェイ家の使用人たちは、グレースの下で歌の練習をしたり、子供たちと母国語の外国語で話す機会を与えてたりもしていました。このように階級の低い使用人たちともお互いを尊重しあって暮らしていた経験は、後にヘミングウェイが友情と尊敬の念を抱いて同情的に書いた一般階級の人の話の基礎となっています。

カーペットではない木造の床にお気づきでしょうか。家政婦の部屋はよりきれいに保ちやすいようにこうなっていました。エド・ヘミングウェイ氏は衛生にも大いに気を使っていたからです。また、いくつもある寝室の家具にも目をとめて下さい。これは、保険の目的もあって、グレースによって管理されていたものと思われる。エドとグレースの寝室は別々でした。

床の通風装置は台所のストーブの熱を部屋に通し、快適で暖かい冬を過ごせるように工夫したものです。

浴室

浴室の様子はある老女によって語られました。。彼女は7歳の時に食料雑貨店を
経営していた父親のサミュエル・オズグッドがヘミングウェイ家からこの家を買
い、すみ移りました。大理石のシンクや足の着いたバスタブ、チェーンを引いて
流すトイレ、そしてクローゼットの位置が再現されました。そのクローゼットの
ドアの一枚は、建て直しのときに屋根裏で見つかり、その色使いや光沢をもとに、
浴室が再現されました。白黒のタイルはその時代に人気のあったフロアリングで
す。革紐はその時代子供をしつけるのに使われていました。後に大きくなった家
族のニーズにこたえるため、浴室は廊下を少し削って拡大されました。

子供部屋

グレースは上の二人の子供が同姓の双子であるかのように育てました。よく似た
ような服を着せ（時には男の子のように、そして時には女の子のように）髪型も
同じにしました。マーセリンとアーネストと一緒に一年生に入れるように、年上
であったマーセリンを一年間余分に幼稚園に行かせずらしました。その時代は双
子は珍しく人気があったためでした。この育て方はアーネストが学校に入るまで
続けられました。他にも男の子に女の子の格好をさせる親がこの時代にはいまし
ましたが、グレースは普通よりももっとそうしていたようです。アーネストがこの母
親の行動にネガティブに影響を受けたという学者も少なくとも一人います。

アーネストとマーセリンはここでおそろいの白いベビーベッドで寝かされました。
何年も後になってマーセリンは、自分のベッドは柵が片方おろしてあったけれど
アーネストのは両方ともあげられていたと誇らしく語っていました。マーセリン
は自分はアーネストと双子ではなく、姉なのだとすることを強調したかったよう
です。

床にあるおもちゃ箱は、マーセリンのものでした。

グレースの部屋

この部屋は、この家の中で最も正確に再現された部屋といってもいいでしょう。
押入れの中でオリジナルの壁紙が発見されたため、再現の際にパターンや色を正
確に判断することができたからです。ヘミングウェイ婦人がこの部屋を使ってい
たわけで、6人の子供のうちの上の4人はここで生まれたのです。出産の担当医
はヘミングウェイ氏でした。アーネストが生まれた時、エド氏は玄関先のポーチ
に行き、喜び勇んでその誕生を告げました。この様子は1999年にアーネスト
の3人の息子とテレビカメラの前で再現されました。

グレースとアーネストの関係は、学者たちに深い興味を引き起こしています。グ
レースの影響がアーネストの学問に貢献している傍ら、同時に徐々に二人の間の
摩擦も強まっていったためです。

アーネストが第一次世界大戦から帰国した後、仕事を見つけることも大学に行くこともしなかった時、二人の摩擦は重大なものでした。アーネストは21歳になって成人する時が近づいていたにもかかわらず、まだミシガンの家に家族と住み、猟や釣りをし、地元の女性たちと遊びまわっていたいたからです。両親ともアーネストに自立するように励ましました。そしてついに21歳の誕生日の数日後にグレースはアーネストに長い手紙で家を出るようにと告げました。その中で、グレースは、「母親の愛情というものは銀行のようなものだ」と述べています。子供が小さい時は、世話をする忙しさと苦勞、睡眠不足、しつけとなだめ、お風呂に入れてやったり着替えさせたり遊んでやったりして、愛情銀行からつねに引き出しをしている。ある程度大きくなってからは、愛情と同情をあたえ、病気のときは世話をし、教育し、導いていく。そして最終的に子供は優しい言葉や、てっだい、たまのプレゼントなどをもって、その愛情銀行を満たすように期待されている。グレースはアーネストはそのような貯金を銀行にまったく入れていないと言っており、またアーネストの欠点もたくさん述べています。その欠点の中には、「怠け者、独りよがり、神への義務をおこったている」などがあります。グレースは、この類似を次のような文章で終わらせています。「あなたの将来には自己破産以外の何もないでしょう。あなたは引き出しすぎました。」グレースは、アーネストに自分の口が母親を辱め屈辱したということがわかって、そうしないということを学ぶまで家には戻ってこないように告げました。

その後アーネストと両親の間で今度はアーネストの初期の作品をめぐって摩擦が起きました。両親は1924年に書かれた「In Our Time」の内容に驚かされたもので、ヘミングウェイ氏はその本を出版社に送り返しました。「The Sun Also Rises」の登場人物やその内容を見た時の両親のリアクションはご想像にお任せします。

しかし、最も険悪な難局は1928年にヘミングウェイ氏の自殺の結果もたらされました。家族の中でただ一人、アーネストは、父親の死が母親のせいだとなじたのでした。アーネストは母親の支配的な性格が父親のうつ病を起こした原因だと感じたのです。そのほかの家族のメンバーは、ヘミングウェイ氏のうつ病は、彼が糖尿病であったことと、財産の大部分をフロリダの不動産につき込み失敗し、破産しそうなったためだと言っていました。それに、ヘミングウェイ氏はいつも手の届くところに銃を置いていました。

この出来事がきっかけでできたアーネストと母親との溝は埋まることはありませんでした。アーネストは1928年の父親の葬儀のあと、二度とオークパークに戻ることはありませんでした。母親のグレースとも滅多に音信をとらず、グレースが病床について死が迫っていた時も銀行に必要なお金を振り込むだけして、見舞いには来ませんでした。アーネストは決して母親を許すことはなかったのです。

アーネストは、母親の父への態度や、自分に彼女の信仰を押し付けようとしたということへの怒りを時々思い出していました。しかし、子供が小さいころに示した愛情や美術への興味をわかせたという彼女の全体的な影響はよいものであったと信じられています。

ヘミングウェイ氏の部屋

夫婦が別々の寝室を持つことはビクトリア時代の習慣でした。ですから、アーネスト・ホールと妻のキャロラインもそれぞれの寝室を持っていました。エド氏とグレースもそうでした。そうすることは頻繁に夜遅くまで仕事で起きていなければならなかった夫婦にとって、便利でもありました。エド氏は夜でもよく患者を診なければなりませんでしたが、グレースも子供たちの世話などで遅くまで起きていることがあったのでした。後のアーネストの主張とは反対で、ここに住んでいたときのエドとグレースの夫婦の間には問題があったとは思われていません。

エド氏は、インディアン弓矢や織物、その他の工芸品など、多くのことに興味を持っていました。色々な自然の標本も集めており、屋根裏でビンの中に保存していました。また、エド氏は特別なピンセットを開発し、それは大量生産されました。しかしエド氏はそれを作ったのは痛みを和らげるためであり、利益目的ではないと言って、特許をとることはしませんでした。グレースは時には、夫のエドよりも稼ぎが多かったのですが、そこには、エド氏がよく無料で患者を診ていたという事実もあるのです。

医者であり父親であったエド氏の人物像を、アーネストは数多くのニック・アダムズの短編小説に書いています。

グレースが子供たちに美術、音楽や文学を教えていた傍ら、エドは理科、医学、自然、キャンプの仕方、猟、釣り、そしてスポーツについて教えていました。ですから、両親は二人合わせると限りなく幅広い分野の教育を子供たちにしていたのです。アーネストをユニークにしたものは、彼の色々な分野にわたる学問への興味でした。アーネストはすべてのことに興味があったといっても過言ではありません。アーネストは、パリのカフェ、カリビアン島の島、アフリカのサファリ、小さいボートの上、そして自分の家、どこにいても、ボクシングや詩やまったく異なる文化や言葉に至るまで本当に様々な事を楽しんだのでした。アーネストが学び愛した多くの物を最初に紹介したのは父親でした。ですから、アーネストは父親を深く愛し尊敬しており、その死を悲しんだのでした。

アバ（お祖父さん）の部屋

テーブルの上のアバとグレースの肖像画をご覧ください。この絵の中で、アーネスト・ホール（アバ）は襟と袖のある服を着、蝶ネクタイをし、晴れ着を着て、イギリスの紳士のようにしています。この絵が描かれたころ、アバはもう儲かっていた刃物製造業の共同経営者の仕事を退職していました。アバの父親も、

イギリスのシェフィールドという町で同じ仕事をしていました。アーネスト・ホールは株や債権の投資家でもありました。

奥の壁にかかっている大きい写真を見て下さい。アバと三人の孫がうつっています。背景はミシガン州の森の中ですが、アバは、いつもと同じフォーマルな装いです。アーネストは左で、空気銃を持っています。アーネストは2歳半の時から、この空気銃を撃つことを許されてきました。アーネストの格好から、祖父への親しみと愛情が感じ取れると思います。

ホール氏は、肝臓の病気で数ヶ月間病んだ後、この家で1905年に亡くなりました。これは、アーネストにとって身近な人物の最初の死でした。下の応接間で行われた葬儀の際、アーネストは6歳でした。

ヘミングウェイの後の物語や小説では、「死」がよくテーマになっています。ヘミングウェイは、「私は生涯、死と共に生きてきた。死を書くことは私の仕事である。」と、言っています。

子供の最初の6年間の経験は後の成長の上で欠かせない重大なものです。これは幼児心理学の最近の研究でも認められています。

アーネストにとって、最初の6年間は幸せなものでした。愛情のある家に育ち、音楽や娯楽や信仰についてを学び、色々な経験をするように教育された、素晴らしい環境だったのです。